

リスク情報と地域防災

特集

「第1回地域発・防災ラジオドラマコンテスト」

災害時に役立つ地域資源を発見し、地域の絆を作り、地域の防災力を高める仕組みとして、防災科学技術研究所では「地域発・防災ラジオドラマ」づくりを提案しています。

本号では、2011年1月30日に実施した「第1回地域発・防災ラジオドラマコンテスト」の表彰式、受賞作品の内容、ならびに受賞者へのインタビューに加え、記念シンポジウム「地域の知と絆で高める防災力」の内容を取りまとめました。

さらに、「防災ラジオドラマに期待する」と題し、審査委員のコメントも併せてご紹介します。

<http://risk.bosai.go.jp/>

災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト

地域防災力を高めるためには、個人や地域コミュニティ、NPO、民間事業者、行政などをはじめとする多様な関係者が協働してリスクに備えるという「リスクガバナンス」の考え方が必要です。リスク研究グループは、災害リスクに関する知識（専門知、経験知、地域知）を統合し、高度なリスクガバナンスを実践するための情報技術や社会制度の研究と開発に取り組んでいます。

目次

第1回地域発・防災ラジオドラマコンテスト・表彰式、受賞作品の紹介……	2
記念シンポジウム「地域の知と絆で高める防災力」……	7
防災ラジオドラマに期待する……	18
第1回地域発・防災ラジオドラマコンテストを振り返って……	21

独立行政法人 防災科学技術研究所

災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト

第1回地域発・防災ラジオドラマコンテスト

ー表彰式、受賞作品の紹介ー



脚本部門受賞者の皆さん



ドラマ部門受賞者の皆さん

防災科学技術研究所では、災害時に役立つ地域資源を発見し、地域の絆を作り、地域の防災力を高めるための取り組みとして、「地域発・防災ラジオドラマ」づくりを提案しており、このたび第1回のコンテストを実施いたしました。

2010年6月1日～11月30日の応募期間中、全国各地から多くの反

響をいただき、最終的には脚本部門25作品、ドラマ（音声）部門32作品、合計57作品の応募がありました。2010年12月21日に本コンテストの7名の審査委員が厳正な審査を行った結果、以下のとおり受賞作品を決定しました。各部門の最優秀作品の内容紹介とともに、受賞者の喜びの声をご紹介します。

審査委員

大森一樹さん

(映画監督・脚本家、大阪芸術大学教授)

今村文彦さん

(東北大学院工学研究科教授、日本自然災害学会会長)

中川和之さん

(時事通信社防災リスクマネジメントWeb編集長、静岡大学防災総合センター客員教授)

千野秀和さん

(NHKアナウンサー・ディレクター)

関戸衛さん

(内閣府総合科学技術事務局 社会基盤・フロンティア分野担当)

南山力生さん

(文部科学省研究開発局 地震・防災課防災科学技術推進室長)

長坂俊成

(防災科学技術研究所主任研究員)

第1回地域発・防災ラジオドラマコンテスト 受賞作品

おめでとうございます!

脚本部門

【最優秀賞】

- ・「避難所は混乱の始まり」 鶴沼中学校地区防災連絡協議会（神奈川県藤沢市）

【優秀賞】

- ・「ふくい輪中の里物語～水害を乗り越えた村人たち」 社西劇団 ちもり一座（福井県福井市）
- ・「絆」 大垣市防災ひとづくり塾（岐阜県大垣市）
- ・「クール」 防災祭（大阪府豊中市）
- ・「地域発 防災ラジオドラマ in 鶴ヶ島市富士見地区」 鶴ヶ島市公民館運営審議会（埼玉県鶴ヶ島市）
- ・「地域の絆で子供を守る」 北条市民レポーター編集会議（新潟県柏崎市）

ドラマ部門

【最優秀賞】

- ・「壊れる物、壊れないもの」 江戸川女子中学校放送部（東京都江戸川区）

【優秀賞】

- ・「シロの微笑み」 The 災防具（神奈川県横浜市）
- ・「想（おもい）～つながる絆～」 流通科学大学 FM Free（兵庫県神戸市）
- ・「妄想の先に」 千歳高校放送局 妄想の先に制作して委員会（北海道千歳市）
- ・「キズナ」 エフエムとおかまち（新潟県十日町市）
- ・「ホームヘルパーは災害最前線！！」 つくば市ヘルパー連絡会（茨城県つくば市）

【優秀賞】

- ・「防災ショットバー」 加古川グリーンシティ防災会（兵庫県加古川市）

※ 応募作品については、ドラマの聴取と脚本の閲覧が可能です。下記の URL よりご覧ください。
<http://radio2010.bosai-contest.jp/>

脚本
部門

最優秀賞

避難所は混乱の始まり (鵜沼中学校地区防災連絡協議会)

ドラマの特徴

鵜沼中学校地区防災協議会では毎月協議を重ね、毎年の訓練・講演会を行い、今年初めて宿泊訓練を実施するまでになりました。宿泊訓練で、市の運営マニュアルだけでは発生するさまざまな問題を解決することはできないことがわかり、誰が来ても即対応できるマニュアルの必要性を痛感しました。

今回は、「もし何も訓練もせず、住民たちがいきなり避難所へ来たらどうなるのか」をドラマにしてみました。



鵜沼中学校地区防災連絡協議会の皆さん

ドラマの内容

12月のある日、深夜2時
震度6強の地震が発生

夜明けとともに
住民が避難所に避難してくる

対応者は市の施設従事者のみ

運営マニュアルに従って
避難所運営を試みる

住民はマニュアル通りに
動いてくれない

役所任せと住民の無関心で
避難所は混乱

受賞者インタビュー (鵜沼中学校地区防災連絡協議会／藤沢市)



長瀬輝行さん

手順やマニュアルが何もない中で、災害時に住民がいきなり避難所に押し寄せたら、避難所は開設できないし、大混乱が起こるだろう。今回はこの混乱をテーマにしました。そして、次の段階として、お仕着せのマニュアルではなくて、われわれの手で、一番簡単なマニュアルを皆で作ってみようという様子を描いてみました。

鵜沼中学校地区防災連絡協議会は、6つの町内会と4つのマンションの方々が集まって日頃から検討会や防災訓練を行っていますので、意思疎通がはっきりしています。近隣の町内会と交流する機会はなかなかありませんが、「防災」をきっかけに集まることで、顔なじみになります。鵜中防災会が何かやるぞという、けっこう参加して下さる方も増えてきています。

作品講評／審査委員のコメント

大規模地震発生時の都市郊外の住宅地の被害を具体的に想定し、行政に頼らず住民主体で避難所を運営することの必要性を理解し、避難所運営や地域の住民主体の防災拠点としての対応課題を住民の目線で具体的に描いている点を高く評価。避難所運営のマニュアル化の取り組みの過程であらかじめ地域の備えを検討し共通認識を高めることの重要性和、その一方で、実際の災害に直面した場合にはマニュアル通りに対応できないこと、さらには、マニュアル通りの対応がえってトラブルを発生させることがあり得ることが盛り込まれている。

- マニュアル通りにはいかない、現実問題になったらこんなことが起きるといった、地域住民のエゴや対立が非常によく描かれている。(大森一樹さん)
- 防災を考える上で、避難所の運営は大切な課題。とりえず避難所に行けば何とかできるという思いがあるが、実は避難所で新たな問題が起こることをうまく伝えている。(今村文彦さん)
- 避難所で起こりうるであろう実態をえぐりだしている。伝え手としても、こういうことを肝に銘じる必要があると考えさせられるドラマだった。(千野秀和さん)

ドラマ部門

最優秀賞

壊れる物、壊れないもの（江戸川女子中学校放送部）

ドラマの特徴

このドラマは学校が舞台です。地震に対して無知な中学生の心の葛藤を表現しました。

ガヤと地震の音は生徒たちで作っているのでよりリアリティーがある作品になったと思います。日々の生活の有り難さが伝わると良いです。



江戸川女子中学校放送部の皆さん

ドラマの内容

「学校なんてなくなればいい」と部活中に話していた時地震が発生

偶然残っていた生徒たちが協力して、家に帰れる準備が整うまで、学校で一週間を過ごす

地震に対する用意をしていなかったことを激しく悔やむ

普段退屈だと思っていた日常が“かけがえのないもの”だったことを再認識する

受賞者インタビュー（江戸川女子中学校放送部／東京都江戸川区）



湯川うらさん

私たちは防災については何も知りませんでしたし、大きな地震に遭ったこともなく、地震が起きたらどうなるのかということもわからなかったので、まず、防災担当の先生や、地震に遭われたことがある先生などに話を聞くなど、下調べをたくさんしなければなりませんでした。それから台本を作ったのですが、すごい分量になってしまいました。7分間にするために、いろいろと調べたことをカットしました。ほかにも伝えたいことがもっとたくさんあったのですが、何とか7分にしました。

地震は怖いものだと思います。私たちは皆バラバラな方向から学校に通ってきているので、地震が起きたらどうなるんだろうと考えた時に、家に帰れなくなると思いました。家に帰れないということは、学校で皆で過ごすなくてはなりません。先生の話などを聞いていろいろなことを想定して作りました。

作品講評／審査委員のコメント

大地震の際、「交通機関の被害によって帰宅困難となり数日間にわたり校内で避難生活を共にする」という実際に起こりうる事態を想定し、家族の安否の不安の中で友人や先生が協力して学校で避難生活を行う中で、自分や友人を守るための事前の防災対策の必要性を訴えている点を高く評価。また、災害を通じて日常生活の中で見落としている大切なものに気づかされるというメッセージから、絆を生かした実践的な防災対策の検討に取り組むことが期待される。中学生の放送部が有するラジオドラマの制作技術によって地域のドラマづくりを支援するなど、中学生の新しい地域ボランティア活動や地域社会への参画につながることも期待される。

- ラジオドラマに大切な時間軸がきちんと描かれ、時間経過がわかりやすく、うまく表現されている。（大森一樹さん）
- 自分たちの課題を見抜き、「学校に残されてしまう」ということを単なる悲劇にせず、自分たちの日常と突き合わせていくドラマ性が素晴らしい。（中川和之さん）
- 「私立高校で遠距離通学している生徒が帰宅難民になる」ということがしっかりとらえられていて、またテーマを絞り、どうアピールするかがよく考えられている。（長坂俊成）

脚本部門

優秀賞

受賞者インタビュー

社西劇団 ちもり一座 (福井市)

輪中とは、水害から田畑や家を守るための堤をもつ地区のことで、防災でもあります。木曽三川の輪中是有名ですが、私たちの住む社西にもあったことがわかりました。しかしなかなか防災というところに結び付きません。



山下征夫さん

そこで劇団を作って、芝居の中で防災が大事であるということをアピールすることにしました。このドラマは300年ほど前の江戸時代を舞台にしましたが、水害で苦しむ領民たちの声を受けて、藩主が協力してくれた。つまり官民一体の共同作業として輪中を作ったわけです。

芝居は姿形で表現できますが、ラジオは音だけで表現しなければなりませんから、声で配役の違いを聴き分けていただかなければなりません。そこは苦労したところですね。

大垣市防災ひとづくり塾 (大垣市)



種田昌克さん

2年前、岐阜県大垣市で「防災ひとづくり塾」を立ち上げました。防災への取り組みの一環として、昨年防災科学技術研究所が行ったe防災マップコンテストに応募しました。その過程で、塾生が協力し合っ

て地域を歩き回り、いろいろな方と出会って話を聞くことができました。素人なりにいいマップができ上がったと思います。

このマップづくりで出会った人々を主人公に、ドラマを作ってみたいと思ったことがきっかけです。個人個人ではなかなかお役に立てなくても、いま塾生も100人以上になりましたが、皆で協力することで良い結果が生まれると思います。人の力ってすごいなあということ、そして絆が本当に大切であるということを実感できました。

防災祭 (豊中市)



加藤広祐さん

今回このドラマを作ろうと思ったきっかけは、高校に届いたコンテストのチラシを見たことです。脚本部門に応募したのですが、実際に災害を体験したことがないので、災害が起こったらいったいどういう状況になるのかということを考えるのが

難しかったです。

作品を作っている過程で、いろいろと危ないことなども再認識できたので、どういったところに危険があるのかということがわかってよかったと思います。

鶴ヶ島市公民館運営審議会 (鶴ヶ島市)



青柳裕子さん

公民館運営審議会(公運審)では、今回「地域の拠点として活動している公民館が、地域災害でどのような役割を果たしていけばよいのか」という諮問を受けました。この宿題を2年間かけて答申しなければなりません。

答申するにあたって、勉強しなければということで、効果的に勉強できる方法としてドラマづくりに取り組みました。

公運審の委員の方たちも地域の事情をわからないということがありましたので、同じ土俵に立つまでにひと苦労あったように思います。

ドラマづくりの過程で、市の防災計画と合わない、公民館にはもう少し違った役割があるのではないかとということに気づきました。そういう意味では、新しい発見があったと思います。

北条市民レポーター編集会議 (柏崎市)

北条地区は、中越大震災と中越沖地震で震度6強の地震を連続して被災した地域です。中越大震災を被災した時、どうすれば安心して、安全に暮らせるかということを探索しながら毎年防災訓練を行ったり、さまざまな整備をしてきました。こうした訓練で経験してきたことを通して、今回のシナリオを書きました。課題を実践したうえでシナリオを書いています。2010年の防災訓練では、子どもたちが学校にいるときに被災したら、子どもたちの安否確認をして無事に自宅に

届けられるかについて皆で議論しましたが、訓練をやるまでが大変でした。シナリオはその実践をもとに2~3人で書き上げました。

このシナリオをもとに、2011年2月6日の「スノーフェスタ」というイベントで、小学校の子どもたちや先生方に劇として演じてもらうことになっています。



戸田洋子さん

ドラマ
部門

優秀賞

受賞者インタビュー

The 防災具（横浜市）

ドラマづくりのきっかけは、戸塚のいろいろな縁や友だちを紹介する「絆」というラジオ番組で知り合った方から声をかけていただいたことです。ラジオドラマを作るのは初めての経験でしたから難しかったのですが、皆で知恵を絞って、脚本から最後に音楽を入れるところまで、自分たちの仲間で作りました。

ドラマづくりの過程で、町内会の方や聾唖学校の方々など、いろいろとお話を伺いましたが、「地域と絆を結び、地域のことは地域で守ろうということを基本に皆でがんばろう」という認識が生まれるきっかけになったと思います。これからもっと地域防災を広げていきたいですね。



栗原文文さん

流通科学大学 FM Free（神戸市）

私たち、流通科学大学頭師ゼミ2回生は、学園祭でラジオ関西と共同で公開ラジオ放送を行いました。その後、ラジオ放送の技術を使って何かできることはないかと思い、このコンテストに応募しました。

しっかりと物事を伝えていかなければならないと考えて、防災という重たいテーマを重たくなりすぎずにバランスをとりながら作るのが大変でした。

今回「絆」をテーマにドラマを作りました。いままではそれほど感じていませんでしたが、例えば近所付き合いとかあいさつなどからしっかり学んでいこうと思いました。



井上雅隆さん

千歳高校放送局 妄想の先に制作して委員会（千歳市）



西野智一さん

放送部の顧問の先生が今回のコンテストのチラシを持ってきて、「作ってみたいか」と言われて、皆で作ることにしました。あえてコメディタッチにしたので、ほかの作品と比べて浮いてしまうのではないかと、きちんと言いたいことが伝わるだろうかという不安がありました。

最初は何をどうつくればいいのか分からない状態で作り始めたのですが、最終的には優秀賞をとることができて、本当に良かったです。

つくば市ヘルパー連絡会（つくば市）

私たちヘルパーの役割や活動を一般の方に知っていただけるチャンスかなと思って、応募しました。

また、防災については各事業所にゆだねられているところがあり、事業所単位ではいろいろと考えていると思いますが、つくば市全体として考えることはありませんでした。今回のドラマづくりでヘルパー連絡会が取り組むことで、マニュアルの整備などにつながれば良いと思っています。

私たちの事業所にはマニュアルがありますが、ドラマを作ってみて、改めて問題点や足りなかった部分などがわかりました。

ドラマを作って終わりではなくて、地域の中で私たちがどのようにマニュアル化していくか、どのような組織と連携をとっていけばいいのか、民生委員との関係づくりなども考えていかなければならないと感じました。



石浜恭子さん

エフエムとおかまち（十日町市）



佐藤広樹さん

新潟県十日町市は中越地震を経験しています。今回題材にさせていただいたのは、中越沖地震の際、隣の柏崎市の“FM ピッカラ”の支援員としてお手伝いした時に実際に体験したことです。

その時に地域の皆さん、支援する皆さんの助け合いや絆を見たのがきっかけです。

7分間で、自分たちが表現したいことを盛り込むのが難しかったのですが、逆に濃縮された形で表現することができたので良かったと思っています。

中越地震にしても中越沖地震にしても、時間とともに風化していきますので、こうしたドラマをきっかけにして皆さんに思い出していただけたこと、そして地域の絆やコミュニティFMが災害時に情報を届けることにいかに努力したのかを知っていただけたこと、そして私たちコミュニティFMへの期待を高めていただけたことが良かったと思います。

加古川グリーンシティ防災会（加古川市）

審査委員会
特別賞

私たちは日頃から防災ラジオドラマをやっています。その延長線上で今回のコンテストにチャレンジしました。「防災」を伝える上で、防災を大きくとらえ、あえて災害を再現しないという伝え方に徹しました。

阪神淡路大震災以降、数々の教訓がありますが、何のために防災をするのかがわからないために、活動が継続できないという部分があります。「自分の大切な人を守るために活動するのが防災だ」ということに徹したことの答えが、このドラマだと思っています。



大西貴典さん

第1回 地域発・防災ラジオドラマコンテスト記念シンポジウム 「地域の知と絆で高める防災力」

第1回 地域発・防災ラジオドラマコンテストの表彰式に引き続き、記念シンポジウム「地域の知と絆で高める防災力」を開催しました。

審査委員長を務めていただいた大森一樹さんをはじめ、4名の審査委員がパネリストとして参加。受賞した13作品を「コミュニティFMから始まる地域防災」「学校から始まる地

域防災」「コミュニティから始まる地域防災」「福祉から始まる地域防災」の4つのテーマに分け、ドラマづくりで苦労した点、またこのようなドラマづくりをどのように地域防災に生かしていくべきかなどについて、パネリスト、受賞者、来場者が意見交換を行う参加型のシンポジウムとなりました。

【パネリスト】

大森一樹さん<審査委員長>
(映画監督・脚本家、大阪芸術大学教授)

今村文彦さん
(東北大学大学院工学研究科教授、日本自然災害学会会長)

中川和之さん
(時事通信社防災リスクマネジメント Web 編集長、
静岡大学防災総合センター客員教授)

千野秀和さん
(NHK アナウンサー・ディレクター)

長坂俊成
(防災科学技術研究所主任研究員)

【司会】

坪川博彰
(防災科学技術研究所研究員)



2011年1月30日(日)、東京国際フォーラムホールD5にて、約150名の方々の参加のもと開催されました



【主催者挨拶】

長坂俊成 (防災科学技術研究所 主任研究員)



長坂俊成

受賞者の皆さん、そして防災にご関心をお持ちの皆さん、本日は全国からお集まりいただきありがとうございます。防災科学技術研究所は国の防災研究機関で、科学技術で防災力を高めるとい研究が大きな柱になっていますが、もうひとつの柱は地域社会を強くすることで防災力を高めしていくということです。その一環として、「地域発・防災ラジオドラマ」を提案しており、このたび第1回のコンテストを行うこととなりました。

ラジオドラマの台本作りの過程で、地域にどんな自然災害が発生するのか、あるいは過去どのような災害が起きたのか。災害が起きた時に困ることは何か、被害が大きくなることを食い止めるには地域でどのような協力や連携が必要なのか、皆さんいろいろなことを調べられたと思います。

災害時には、想定を超える事態が起きることがあります。その時に地域がいろいろな形で協力連携できる絆を作り、減災をはかるために、私たちはこの防災ラジオドラマづくりを提案しています。

テーマが防災ですので町内会や防災会などが中心になるかなと思っていたのですが、中学生や高校生、コミュニティ放送局、公民館の運営組織や高齢者の介護ヘルパーの事業所など、日ごろ防災とは直接かわりのないグループからの応募も多く、地域の防災力を高めるという目的にも適った結果となり、主催者として大変感謝しております。4月には第2回のコンテストの準備もスタートする予定です。今回応募された方々もまたチャレンジいただきたいと思います。受賞者の皆さん、改めておめでとうございます。

コミュニティ FM から始まる 地域防災

受賞作品・団体

- キズナ
エフエムとおかまち
- シロの微笑み
The 防災具
- 想(おもい) ~つながる絆~
流通科学大学 FM Free
- 防災ショットバー
加古川グリーンシティ防災会

■防災で期待されるコミュニティ FM の役割

坪川：コミュニティ FM 局は地域の防災にどう役立つのか、あるいは地域の防災力を高めることができるのでしょうか。コミュニティ FM は阪神大震災のあと、災害時の地域の情報源として大変注目されました。まだまだ情報としては基盤が弱いところもありますが、全国に 200 局以上が開局されていると思います。最近でも、2010 年 10 月 20 日に鹿児島県の奄美大島で豪雨がありましたが、その時に地元のあまみ FM が、24 時間放送を 5 日間行って、住民の方々が大変助かったという話を聞きました。今回作られたドラマが、地域の防災力にどのように役立つのかについてお聞かせください。

とおかまち (佐藤)：エフエムとおかまちは、中越地震後に市民の声でできたラジオ局です。新潟県にはコミュ

エフエムとおかまち
佐藤広樹さん



ティ FM が 10 局ありますが、どのような支援体制ができるかを議論した結果、全国に向けて放送するのではなく、地元に向けての細かい情報、例えば水はどこでもらえるか、お風呂はどこで入れるか、いなくなった人やペットの情報まで放送します。

被災地において感じるのは、記憶はどんどん薄れていくということです。ラジオドラマというかたちでその時の体験を多くの方々に聴いていただくことで、記憶や教訓を思い出していただけるのではないかと感じています。こうしたドラマづくりはコミュニティ FM でやることではないかと感じています。

防災具 (栗原)：今回は FM 戸塚が地域の絆を作ってくれました。消防団では地域密着型で防災活動をやっていますが、普段はどんなことをやっているかが地元の方にはわかりづらくて、消防署員とかわれていたりすることもあります。おのおの仕事をもちながら、自分たちの町は自分たちで守ろうという精神をもってボランティアでやっているのが消防団ですので、われわれの活動もドラマを通して知っていただきたいと思っています。

地元の戸塚区には柏尾川が流れていて、この増水による被害があります(柏尾川：神奈川県南部、戸塚区より藤沢に流れる境川の支流。2004 年 10 月の台風 22 号で増水して氾濫)。今回のラジオドラマでは、大雨による土砂災害を取り上げました。

流通科学 (井上)：今回のラジオドラマコンテストで、絆ということを非常に大事に思うようになりました。すぐにできることとして、普段からの絆づくりということで、例えば日常的な朝の挨拶といったコミュニケーションづくりをしっかりとっていくことが大切だ

と思います。

加古川(大西)：5 年前からインターネットラジオ局を始めて、防災会から発信していて、地元の FM バンバンにも協力していただき、コラボレーションで「防災ショットバー」を放送しています。

普段の生活の延長線上に防災を置く、そうすれば絶対に防災は長続きするものだとことを訴えています。



加古川グリーンシティ防災会
大西寛典さん

坪川：コミュニティ FM はどういう役割を期待されているのでしょうか。

中川：阪神淡路大震災で役に立ったのは FM 神戸、エフエムわいわいといった地元の FM 局です。しかし災害時だけでなく、日ごろからやれることとしてこうしたドラマを作るのは素晴らしいことだと思います。「防災ショットバー」は最後の結論がなかなか深いところまで行っていて聴き惚れてしまい、特別賞にさせていただきました。

それから私は柏尾川の近くの横浜市栄区に住んでいて 6 年前の台風 22 号の時は町内に床上浸水の被害もありましたので、The 防災具の「シロの微笑み」も身近な話題で非常に納得できました。コミュニティ FM の皆さんは防災が頭に入っていると思いますから、こうしたドラマを全国で作ってほしいですね。

■声のもつカーラジオが担う心の安らぎ

坪川：音声だけで耳から聴くラジオド

ラマは、頭の中に浮かぶイメージも聴き手によってだいぶ違ってくると思うのですが、目で見えるものとは違った意味で想像力をかき立てるような効果があるのではないのでしょうか。表現方法としてのラジオドラマをどうお考えですか。

大森：やはり防災時はラジオですよ。もうご記憶が薄れていると思いますが、阪神大震災が起きた16年前は携帯電話もなくて、NTTの公衆電話に皆並んで順番を待っていたという光景がありました。インターネットもありませんでした。いまは災害が起こった時には、携帯電話とインターネットが主役になるように言われていますが、実際に災害が起きたら、どちらもつながらないかもしれません。やはりラジオだと思います。



審査委員長
大森一樹さん

阪神大震災が起こる以前に、私はラジオ番組を持っていたんですが、スポンサーがつかなくなってだんだん縮小していてラジオがいなくなる時代が来るんじゃないかと言われていた矢先に、地震が起こった。そしてラジオは、皆にとって一番便利なものであるということがわかりました。

だから防災ラジオドラマは、非常に意味があると思っています。災害時には声を掛け合うということが大事ですが、「声が聞こえてくる」という意味でラジオは残ると思います。

会場：茨城県つくば市のコミュニティFM局「ラヂオつくば」です。さまざま

な地域の方が作った作品を聴いたり、シナリオを拝見すると、つくばとは違った、地域ごとのいろいろな事情があって、おもしろいと思いました。つくばで作ったものはラヂオつくばで放送していますが、ぜひほかの地域の作品も放送させていただきたいですね。ドラマを通して、いろいろな地域のことを勉強させていただきたいと思います。

とおかまち（佐藤）：ラジオには“声の持つ力”があると思います。中越地震の際、わが家は両親と私の3人で被災しました。幸いなことに家は壊れませんでしたので、家でずっと過ごすことができました。夕方に地震が起きて夜中の3時まで余震があり、親父が明日もあるからそろそろラジオを消して寝ようとしたところ、お袋が「消さないでくれ。声を聴いているだけで安心するから」と言うのです。揺れた数十秒後には、NHKラジオがどこで何が起こったかを伝えてくれましたが、携帯電話、インターネット、テレビはすべてつながりませんでした。何が起きているのか分からない時に、心を休めさせてくれ、そして情報網として一番有効だったのがラジオでした。

災防具（栗原）：聴こえるということはずばらしいことですが、耳の不自由な方もいます。今回のドラマでは、耳の不自由な子どもを主人公にしましたので、聾唖学校にもおじゃましていろいろと勉強させてもらいました。

聾唖の方は、メールも読めますし写真も見ることができます。主人公の元氣くんには、消防団の人たちが訓練している姿を見てもらって、声の出演をしてもらいました。

これからは、目の不自由な方、耳の不自由な方に対する防災や救助についても取り組んでいきたいと思っています。

The 災防具
栗原正文さん



■パーソナルトークが可能なメディアとして

坪川：ラジオはリスナーと局との距離がテレビより近いと言われていますが、コミュニケーションとしてのラジオの力をどう感じていらっしゃいますか。

千野：ラジオには自分に問いかけてくれたり、自分に向かって話をしてくれる人がそこにいるような感覚があります。テレビはなるべく多くの人に伝わるようにという仕掛けで、それを意図して作りますが、ラジオはそういった作り方もできる半面、“いまあなたに話しているんですよ”といったパーソナルトークをすることが可能なメディアです。

特に、コミュニティFM局の皆さんはより顔のわかる人たちに呼び掛けることができます。近さということではわれわれには絶対にできない情報伝達を担っている。

われわれも被災地の皆さんにそれなりの生活情報を放送していますが、カバーできない部分はコミュニティFM局に担っていただいて、うまく役割分担しながら、どちらを聴いても地域の方々が少しでも安心できるような体制



審査委員
千野秀和さん

を作っていきたいですね。ラジオは音声だけですから、ある意味情報に集中できます。今回の57作品それぞれに皆さんの思いがこもっていました、32のラジオドラマには、それが声にもこもっていたと思います。

長坂：町内で火が出て建物が倒れて初期消火、救急救命ということだけではなく、さまざま方への配慮が必要です。平時においてもコミュニティFMの役割は大きいのではないのでしょうか。地域の中間支援機関として市民活動推進センターなどがいろいろなネットワークづくりをしています。コミュニティFM局もこうした役割を果たせるのではないかと強く感じました。

【コミュニティFMとは】

1992年に制度化された超短波放送(FM)用周波数(VHF76.0~90.0MHz)を使用する放送で、最大出力は20W。放送エリアが地域(市町村単位)に限定されるため、地元の情報に特化し、地域活性化に役立つ放送を目指している。2010年7月現在、242局が開局している。

日本コミュニティ放送協会：
<http://www.jcba.jp/index.html>

学校から始まる地域防災

受賞作品・団体

- 壊れる物、壊れないもの
江戸川女子中学校放送部
- 妄想の先に
千歳高校放送局 妄想の先に制作して委員会
- 想(おもい) ~つながる絆~
流通科学大学 FM Free
- クール
防災祭

■ドラマづくりで苦勞したこと

坪川：今回のコンテストでは、学生の

皆さんからの応募が多くありました。ドラマを作られた経緯や苦勞した点などをお話いただけますか。

千歳(西野)：今回のドラマは顧問の先生がチラシを持ってきて作らないかということで、作り始めました。

苦勞した点ですが、あえてコメディにしたので、ちゃんと伝わるかとか、ふざけ過ぎてないかとか、その辺で不安があってそれを分かりやすくするのに苦勞しました。

千歳高校放送局
妄想の先に制作して委員会
西野智一さん



流通科学(井上)：私たちは、学園祭という場を借りてラジオ関西との共同という形で、公開ラジオ放送を行いました。その中で、自分たちが勉強したことを周りの人に伝えられるか、今後はどう生かせるかということを考えて、今回このコンテストに応募しました。すごく悲しいところと、あまり悲しくなり過ぎないようにシンプルに伝えなければいけないようなところとのバランスの取り方に苦勞しました。

防災祭(加藤)：高校生の視点で、高校生から見てこれは危険なのではないかといったことを、自分で探して想像し

防災祭
加藤広祐さん



て作品の中に入れたので、どういうふうに危険なのかとか、ドラマなのかリアルなのかといったことを表現するのに苦勞しました。

江戸川(湯川)：ドラマづくりを通して、地震の時にどんなことが起こるのかといったことを調べたり、皆で話し合えたことが、とてもいい経験になったと思います。私たちは誰も大きな地震を経験したことがないので、台本を作るに当たって、まずは先生や地震を体験した人に話を聞くことから始めました。それから地震が起きたらどうなるのかを皆で考えたのですが、家に帰れないんじゃないかという話になって、帰れないならその間何をするのか、何をしなければならぬのかということテーマに作ろうという話になりました。

何かを表現したいと思って放送部に入って、以前にもラジオドラマで良い賞をいただけたのですが、これはさらに良い賞で、中学生時代の集大成といってもいいくらいの作品です。



江戸川女子中学校放送部
湯川つららさん

■豊かな発想力を地域防災に生かす

坪川：今回取り上げられた自然災害は、57作品中44作品が地震でした。水害が6作品、その他雪などもありましたが、日本では地震が圧倒的に怖いと思われているという感じがしました。学生が地域の防災についてドラマを作ったり、これをキッカケにして地域の方々と防災の取り組みにかかわっていくということについてどうお考えでしょうか。

今村：今回のドラマコンテストで改めて、若い人たちの力を感じました。非常にポテンシャルが高いし、発想が豊かです。コメディタッチとか、いろいろな議論をまとめて工夫するなど、ある程度知識や経験があるような大人にはなかなかできないことだと思います。また質も高かったですね。これだけ多くの学生さんたちが最優秀賞や優秀賞を受賞されたという結果にも表れていると思います。やはりテーマがすばらしい。

特にびっくりしたのは千歳高校のわずか10秒の話（緊急地震速報の10秒の間）です。妄想を織り交ぜながら時空間を超えた内容になっていて、大変感心しました。



審査委員
今村文彦さん

今後の希望としては、リアル感をどうやって出すかについてもっと勉強してほしいと思います。例えば過去に自分の地域でどんな災害が起きてどのように復興したのか、あるいはどのような言い伝えや防災文化としての伝統が残っているか。さらには地震の「揺れ」を音で表現するのはとても難しいけれども、例えば縦揺れがあつて横揺れがあつて、大きな地震になると数秒ではなく数分と長い時もあります。そういう基本的なことを勉強し、ぜひドラマの中に生かしていただきたいと思います。

流通科学（井上）：ドラマづくりは大変でしたが、いろいろと役に立ちました。

防災はヘビーなテーマで、しかもい

流通科学大学 FM Free
井上雅隆さん



ろいろな方が被災者になられるので、私たちは留学生や日本に住んでいる外国人にスポットを当てました。ほかの団体との「違い」を出すのにも苦労しました。

坪川：実は学生さんからの応募作品には、留学生の方が地震の時にパニックになるテーマを取り上げたものもありました。自主防災の方々ではあまり取り上げられないようなテーマが多く、とても新鮮でした。学生さんたちが作られたドラマから、逆に地域の防災を考えるようなルートはあまりない取り組みだと思いますが。

長坂：今回のコンテストを実施する前、2010年2月に愛知県岡崎市の竜南中学校の2年生11人に2日間でドラマづくりに取り組んでもらいました。でき上がった作品と、これをホームルームで聴いた生徒たちが書いた作文と一緒に町内会にプレゼントし、町内会ではこれを回覧版で回して感謝の言葉やコメントをまとめて中学生に返す、というキャッチボールが生まれました。地域における防災の主体は、自治会や町内会などが多く年配の方々を中心にありますが、防災の知識としては不十分かもしれませんが、中学生や高校生、大学生に最初の一步を踏み出してもらって、地域の方々がそれに肉付けしたり、共に地域の防災について考えていくということにつながればいいですね。

若い人たちのドラマづくりには高い技術があります。地域の町内会によってはドラマの音声の収録や編集ができないというところもあるでしょうから、コミュニティFMや地元の中学生、高校生、大学生にお手伝いいただくことで、日ごろの絆が災害時の絆にもつながるのではないのでしょうか。

千野：学生さんたちの作品を最初に聴いた時は、中学校や高校の放送部、大学生の皆さんのレベルと質の高さに驚きました。テクニックの部分では、インターネットはもちろんのこと、フリーの音楽編集ソフトなどもうまく使っていると思いますから、知恵の部分について、地域の方々の経験や教訓を吸収してお互いに還元できる関係になれば、素晴らしい作品ができるのではないのでしょうか。あまりすごいものができると、NHKを聴いてもらえなくなるのではないかと心配ですが（笑）。

それから若い方々の作品の良かった点は、表現力を非常に研究しているということですね。ラジオドラマは一度ですんなり理解できることが大事です。テレビは画面にスーパーも出せますし、映像が補ってくれますが、ラジオドラマは一度聴いた時にわからないと、そのあとが全部わからなくなってしまいます。大森監督が言われた時間軸ということを含めて考えると非常に難しいのですが、それが若い人たちの作品には見事に表現されていました。私も勉強になりましたし、番組の構成を作る上で参考にさせていただきたいと思っています。

会場：中高生の非常に素晴らしい作品を聴かせていただいて喜んでます。いま声優ブームで、中学や高校の放送部の生徒は皆でこういう作品を作るのが非常に好きですから、こういう

コンテストは非常にありがたいと思っています。しかし中学生、高校生は地域の自然災害についてあまりよく知りませんし、神戸でも16年前の地震は高校生にとっては歴史の中の出来事ですから、適切な指導者がいないと防災をテーマにした作品を作るのは難しいと思います。自然災害への理解という点については、ぜひ防災科研から適切なアドバイスをお願いします。

それから募集の時期も考えていただきたいですね。NHKの放送コンテストは6月が提出時期で、11月は全国総合文化祭の作品を作る時期ですので、そこを外していただくとともに参加校が増えると思います。ぜひよろしくお願いします。

大森：中、高の放送部は、われわれの時代からありましたが、脈々とその伝統が続いているということを改めて知りました。それが目立つということは、こう言うのは失礼ですが、防災関係の方々で作られたドラマがあまりにも素人っぽかったということもあって、それとの差もあったかと思います。

自治会や防災会の方々は災害に備えて検討されることが主旨であって、良いドラマを作ることが主旨ではありませんから、そちらを一生懸命やられるよりは、できましたら地域の中学校や高校の放送部にやってもらいたいテーマを持って行って、連携して作品を出されることをお勧めします。江戸川女子中学校の方が「放送部に入るのは表現したいことがあるから」と言われましたが、表現するにはそれなりの技術と方法を学ばなければできません。それがあから、放送部はこうした作品を作ることができるのだと思います。地域の方々は、ぜひ放送部にまかせてはいかがでしょう、という助言です。

コミュニティから始まる 地域防災

受賞作品・団体

- **ふくい輪中の里物語～水害を乗り越えた村人たち～**
社西劇団 ちもり一座
- **地域発 防災ラジオドラマ in 鶴ヶ島市富士見地区**
鶴ヶ島市公民館運営審議会
- **地域の絆で子供を守る**
北条市民レポーター編集会議

■コミュニティの活動と地域防災

坪川：さて今回は、いわゆる防災を目的としない、地域に元々あるさまざまなコミュニティのグループからの応募もありました。受賞グループの中でこれに該当するのが、福井県福井市の社西（やしろにし）劇団「ちもり一座」、埼玉県鶴ヶ島市の鶴ヶ島市公民館運営審議会、そして新潟県柏崎市の北条市民レポーター編集会議の皆さんです。通常は防災を目的としていないけれども、防災の時に役立つだろうという視点でドラマを作っていただきました。

司会
坪川博彰



行政でもなく、住民でもなく、その中間に存在するのがコミュニティで、町内会もそのひとつかもしれませんが、こうしたコミュニティが防災に取り組む。

その重要性が分かったというのも阪神大震災のひとつの結果だと思うのですが、コミュニティが地域でこういうド

ラマ作りをやることについてどうお考えですか。

大森：私は芦屋市に住んでいるのですが、町内会の活動などが非常に強くなったのは、震災の後の教訓として、ですね。災害を受ける前はバラバラでした。災害前からそういう活動を活発にすることの難しさもあると思います。ただ、一度体験した地域の絆は強くなりますね。こうしたことを伝えていく方法としても、ラジオドラマのコンテストが続いていくのは良いことだと思います。

坪川：では受賞者の方から、作品づくりで苦労した点などを伺いましょう。

ちもり（山下）：社西地区では、防災、環境、歴史をまちづくりの三本柱にして、人口約6000人の小学校区でいろいろと活動しています。福井は1948年に大地震があって、地域がこっぱみじんに潰れてしまいました。

最近では足羽川（あすわがわ）という一級河川の土手が決壊して洪水になり、隣の地域には浸水の被害がありました。社西地区にも避難指示が出ましたが、幸いなことにわれわれのところは助かりました。しかし、時間が経つとだんだんと記憶が薄れていきます。災害対策は持続することが重要だということで毎年避難訓練を行っています。最近、町内会長や自治会長もなかなか成り手がなくて一年交代にしていますから、訓練については企画室を設け



社西劇団 ちもり一座
山下征夫さん

てここで段取りをしております。

今回の作品では、300年前の江戸時代の話を取り上げました。村や田に土手を作って水害から守る輪中は、岐阜県と愛知県の本曾三川のものがありますが、社西地区にもあります。洪水に遭うのはもうたくさんだということで、領民たちが考えて大名や藩士に相談を持ちかけてきたものです。

これが現在の防災の鏡になるのではないかということで「ちもり一座」という劇団で取り上げ、これまで舞台上で4回ほど公演しています。今回は7分間という制限がありましたから、この脚本を短くして応募しました。

鶴ヶ島（青柳）：鶴ヶ島市は人口7万人の都市で、地域ごとに6館の公民館があります。この運営については、各公民館から利用者1人、地域の代表、そして専門家4人ほどで公民館運営審議機会（公運審）を組織して行っています。現在市内には600ほどの団体・サークルがあって、公民館でさまざまな活動を行っています。

今年度、公運審に与えられたテーマが、地域の活動の拠点として緊急の防災にどういう役割を果たせばよいのかということでした。2年間をかけてその宿題に対する答申をするという仕事をいただいたわけです。そのために何を取っ掛かりにすればいいのか。公運審には各地域から参加していますし、皆さんが防災に関心があるかというところではない。非常に難しい諮問を受けたわけです。

まずは委員が研修や学習をしたり、防災活動をしている自治会の方を呼んでお話を聞いたりすることから始めましたから、ドラマづくりをしようという共通認識を持つには少し時間がかかりました。

今回のドラマでは、富士見公民館を

舞台にしました。市の防災マニュアルでは情報の拠点として公民館の役割があるとしていますが、避難所は小学校と中学校で、ほとんどの住民がそこに避難します。

鶴ヶ島市公民館運営審議会
青柳裕子さん



公民館は情報の拠点ということになっていますが、ドラマを作る過程で、一番たくさん集まる小学校の避難所運営委員会が一番情報を持っているということに気づきました。

一方で、避難所に集まって来るお年寄りや障害者、つまり援助が必要な人たちは学校では対応しきれないこともわかりました。そこで情報の拠点をむしろ学校に移して、公民館は要援護者の人たちを受け入れる場所しようということになりました。市の防災計画にモノ申すと言いますか、新しい考え方を提案できたこと、そして市の職員や防災にあまり関心のない公運審の委員と一緒にいろいろな考えながら作品を作ったことが、評価されたのではないかと思います。

北条（戸田）：柏崎市内には住民組織のコミュニティと公民館を一緒にしたコミュニティセンターが31あります。北条地区のセンターは1976年にできたのですが、当時は住民の親睦と連携を深めるということが目的で、住民の絆を作っていく活動、体育祭や文化祭、スノーフェスタ、あるいは一斉清掃などを行ってきました。

災害が少ないのが取り柄のような北条だったのですが、2004年に未曾有

の地震で被災しました。その時には防災組織も何も無くて、まさに地域の防災力が問われることになりました。

当時23の町内会がありましたが、対応はバラバラでした。震災後、こうした状況をそのままにするか、すぐに対策を練るかで意見は分かれたのですが、想いは熱いうちに、ということで、その年すぐに自主防災組織を整備しました。その時に誰がリーダーになるかということでだいたい議論しました。町内会はまず自分たちの町内を見なければなりませんから、ではコミュニティ振興協議会の会長が災害対策本部長になりましょう、その代わり全町内も自主防災組織を立ち上げましょう、ということになりました。そしてすぐに要援護者台帳の整備など、さまざまなことに着手しました。さらにそれが本当に機能するかどうかを検証するために防災訓練を行い、また4年に一度は地区をあげての防災訓練を行うことを決めて、2010年10月に2回目の総合防災訓練を行いました。



北条市民レポーター編集会議
戸田洋子さん

それまでコミュニティでは、地域の文化を高める活動や住民の健康を促進する事業をやっていましたが、それだけではなく安心して住める地域を作るのも役割だということで、安全対策室も新設しました。私たちのコミュニティは、課題を見つけ、それを解決して住みよい地域を皆で作ろうという住民組織ですので、その課題が解決されれば、また新たな課題を見つけています。地域の特産品づくりなどもやっています

が、一番大切な使命は、「安全に住める地域を作る」ということだと思っています。

■地域の目線で防災の有効策を検討する

今村：わが国において過去に災害が起きていない地域はありません。しかし、時間の経過とともにその経験や当時の対応などはだんだんと忘れ去られています。それをもう一度見直すことは、将来のわれわれの姿を見直すことにもつながると思います。

長坂：行政の防災マニュアルや防災計画をまったく疑わずに訓練している地域は、全国にたくさんありますが、鶴ヶ島市の公運審は、地域の目線で有効策を描かれました。

これをきっかけに、行政との本格的な話し合いも始まるでしょうし、これは今回のドラマの大きな成果のひとつではないかと思います。

柏崎市北条地区の北条コミュニティ振興協議会は、防災を防災として扱うのではなく、子育てや環境、福祉、地域振興といった地域のよろずの課題を住民主体で解決し、その中で防災にも取り組まれています。

北条では中越地震、中越沖地震と2度の被災を経験されましたが、ど



審査委員
長坂俊成

ちも学校がお休みの日でしたから、子どもたちが授業中に被災するという経験はありません。そこで、親御さんと学校だけではなく、コミュニティあるいは町内会で子どもたちをどう守っていくのかというテーマでドラマを作られました。しかも実際に昨年の訓練で検証されていますから、訓練シナリオがドラマシナリオになっていることが非常に実践的であると感心しました。

福祉から始まる地域防災

受賞作品・団体

●ホームヘルパーは災害最前線!!
つくば市ヘルパー連絡会

●シロの微笑み
The 災防具

■防災と福祉を考える

坪川：では最後に、災害時における要援護者あるいは災害弱者と呼ばれる方々をテーマにしてドラマを作られた、

つくば市のつくば市ヘルパー連絡会と、横浜市のThe 災防具には再び登場していただきます。いま急速に社会が高齢化していますが、災害時の福祉の問題はなかなか大変です。昨年の奄美の豪雨で亡くなられた2人の方々はいずれもグループホームに入居されていた認知症の方でした。職員1人が9人の高齢者をケアしなければならない中で、どっと水が来て、助けることができなかった。これが、現在私たちが直面している社会でもあります。今回ドラマを作られて、このあたりはどうお考えでしょうか。

つくば（石浜）：高齢者の方々は、ご自分たちが元気だったころには介護サービスの制度が無かったわけで、介護が必要な立場になるとなかなか受け入れることが難しい。私たちを受け入れてくださる方もいますが、そうでない方のほうが多いということもあり、つくば市のヘルパー連絡会ではそこを絆づくりの第一歩として考えました。

つくば市ヘルパー連絡会
石浜恭子さん



高齢者とそのご家族、事業所のヘルパー同士、市内の事業所間などそれぞれの絆、さらには市の地域包括センターや民生委員の方々との連携の必要性など、ドラマづくりを通して実感しました。

私はつくばメディカルセンターヘルパーステーションふれあいという事業所におりまして、管理者をしながらヘルパーとしても活動しています。私の事業所は朝6時から夜8時までが活



動時間なのですが、24時間営業している事業所もありますので、ドラマを作る際にヘルパーたちの時間を合わせるのに苦労しました。実際にドラマ収録の時も、当日になって急な訪問で来れなくなったヘルパーがいたり、人集めが大変でした。

また、つくばという地域は比較的災害が少なく、大きな地震や台風もありませんし、雪もほとんど降りません。自分たちが予想する範囲でいろいろな状況を想像しながら作りましたので、そのあたりが一番頭を痛めたところですね。

さらに、実際に私たちが活動するのは一対一の利用者さんのご自宅ですから、その時にどう守れるかということについては大きな課題を見つけることができました。事業所によっては、災害マニュアルや緊急連絡表を整備しているところもありますが、事業所任せになっていて、どこでどのように作られているかは一律ではありません。ですから実際に災害が起きたら困るだろうと思いましたので、事前準備が必要だということを感じました。

坪川：The 防災具では、耳の聞こえない子どもを主人公にさせて、障害を持った方々への支援を届かせるための方法としてドラマを作られました。作成過程での資料も膨大で、実に熱心に調べられていたことに私たちも驚きました。

防災具（金子）：ドラマ作りを始めるにあたって、コミュニティFM、消防団、聾唖者という3つの柱を立てました。しかし当初15分だった脚本を削って7分にしている過程で、焦点がぶれてきてしまいました。

聾唖者の方二人にお話を伺ったのですが、伺った後に、ドラマができ上がったと言いかけて言葉が止まってしま

いました。聴かせてあげたいのに聴いてもらうことができない。

聾唖者を題材にしているにもかかわらず、彼らへの配慮ができたのかどうかということについて、反省点を抱えました。地域には要援護者や障害を持った方々がいる。ドラマにより人間味を持たせたいと思って題材に取り上げたのですが、実際にはそこまで深く考えていなかったのではないかと反省です。それを踏まえて、まずは聾唖学校に今回のラジオドラマを伝えられるような、例えばスライドショーにしてセリフをテロップで流すといった映像を作っていこうと考えています。



The 防災具
金子雅之さん

私自身、地元でPTAの会長もしている関係もありまして、特に子どもたちのことにとっても興味があります。システムとして防災を取り上げると、子どもたちには届きにくいし、難しいものになってしまう。しかし防災に取り組んでいる私たちの姿を、子どもたちに伝えたりしてもらうことで、小さい時から防災というものを頭の中に描いてもらいたい。そのためにも、今回のドラマをCD化して、戸塚区の小学校、中学校に配りたいと思っています。小中だけでなく、高校生や大学生にも刺激になって、こうしたドラマづくりにかかわってくれればいいですね。

システムやマニュアルを作るよりも、こうした活動に参加していくことが、防災やいざ災害時で人が集まった時に機能して、被災者たちがまとまるのではないかという感じを強く持っています。

■地域の新たな絆づくりを目指して

坪川：とても素晴らしいご意見をありがとうございました。行政が作るハザードマップや被害想定ではなくて、地域の皆さん自身が作ったドラマの方が実はずっと防災に役立つのではないかという点についてどうでしょう。

中川：今回の作品でも、マニュアルに関するものもたくさん出てきました。作らなければ仕方ないので作られているものがある。

しかし、ひとつひとつの事柄をイメージしていくのは、やはりドラマづくりのような取り組みによってできるんだということを実感させてもらった気がします。

16年前の阪神大震災の時には介護保険制度がありませんでしたから、介護の枠組みも共有されていなくて、災害対策にもビルトインされていません。ここ数年、いくつかの災害時にはヘルパーや介護保険の枠組みなどが動いていますが、なかなか世の中に伝わっていないという印象を持っていたので、こういうドラマを作っていただいて、現場にこういう方々がいらっしゃることいろいろな人が救われるのかと感じました。

家族の絆のようなものが別の形に置き換わっていくのが介護の仕組みだと思いますし、それが社会のつながりを作っていく。あるいは新たな絆だと思いますので、そこをきちんと表現していただけたことがうれしいですね。



審査委員
中川和之さん

坪川：昨年9月の防災の日にNHKラジオで放送されたドラマは、津波が来るということでグループホームの方々が避難するという内容でしたが、ある種のリアリティを表現することで、福祉の方々の防災に対する見方が変わると思われますか。

千野：自主防災組織の方々は、スタートが防災ですからストレートですよ。ただ、介護だけに限定しませんが、やはり介護事業者の方々は高齢者や障害のある方へのケアを抱えた状態で防災に入るという苦労がもうひとつあると思います。その段階を踏むということを考えると、こうした防災ラジオドラマなどをきっかけに地域の人たちがつながって、自主防災組織の方々も力添えしながら、アイデアを出したり、一緒に訓練することで、プラスアルファの力をうまく利用しながら防災を考えていただきたいと思いますね。

昨年の山口県防府市の土砂災害の例をみても、どうしようもないことが起きるということについてもっと多くの人が理解しなければならないですし、そのためにもこのドラマづくりへの取り組みが生かせるのではないかと。過去の経験を踏まえること、そして介護に携わる方々が活動の中でどう取り組めばいいのかという2点においても必要だと思います。

会場：つくば市社会福祉協議会でも今回のドラマづくりにかかわって、多くのことを考えさせられました。ヘルパーステーションという所で、ヘルパーさんの活動を中心に考えたのですが、いろいろな人がかかわってさまざまなケースを想定しながら作り上げました。災害は誰にでも起こることですから、ドラマにかかわった方が自分の家族や友人、地域の人たちとこのこ



とを話題にするだけでも、意識が高まるのではないのでしょうか。楽しく取り組ませていただきました。

長坂：今回はドラマの舞台が自宅でした。入所の施設も特別の養護老人ホーム、ケア付きのマンション、グループホーム、デイサービスなどいろいろありますが、施設の管理者にお任せで、地域との接点がなかなか見えません。北条コミュニティ振興協議会では、要援護者に すが、さまざまな福祉のサービスが地縁になって、一人の方の健康が保たれている。そういったことも題材になりますね。これによって災害に強い社会になっていくのではないのでしょうか。

地域発・防災ラジオドラマへの期待

■次回も良い作品が集まることを期待

大森：金曜日、芦屋にいましたら、突然震度3.6ぐらいの直下型地震がドカンときました。久しぶりに災害に遭った気がします。震災体験は遠くなりにはけりと思っていましたが、直撃を受けてビックリしました。ところがニュースのテロップみますと、

震源地は大阪湾の芦屋沖で、芦屋市、東灘区の本当に狭い範囲で起きたようで本当に局地的な災害でした。

阪神大震災の時にも淀川を渡ったらバーゲンセールをやっている大阪の人たちを見て、ガックリきたのを思い出しましたが、災害というのはいろいろな形でわれわれの前に提示されるということを、改めて感じました。次回のコンテストにもまた良い作品が集まるように願っています。

■学びの機会としてのドラマづくり

今村：わが国には本当にさまざまな災害が起こっています。そのことを考えても、学校における防災教育は非常に重要だと思います。しかし学習機会も少ないですし、教材も限られていますから、そんな中でこの防災ラジオドラマコンテストは非常に有意義なのではないのでしょうか。将来を担う子どもたちが防災や減災についての知識を持っているかはいかには、大きな差になると思います。

それから学校は学びの場ですが、そこでの知識だけではなくて、災害や防災について、自分自身に何ができるのか、何が必要なのかを自主的

に学ぶ場としても、こうしたコンテストを活用していただきたいですね。学校に限らず、地域の皆さんにとっても、学ぶ機会としてとらえていただければと思います。

■日本中の防災力の向上を目指して

中川：阪神大震災のあと、災害、防災、減災について考えることが大切だと伝えるためのさまざまな道具が開発されてきたように思います。まちあるき、地図づくり、その地図を使ったDIG（災害図上訓練）のように地域をイメージーションするようなワークショップや問題を考えるようなクロスロードなど、いろいろあります。しかしそれだけで終わってしまっているケースも多い。

ラジオドラマは、誰かに聴かせることが前提です。そこにいろいろな人たちがかわる、例えば学校の放送部と地域の方々、専門家、土木事務所の人など、さまざまな人たちが一緒になってドラマを作る。防災と考えると暗くなりますが、ドラマは楽しく作れます。今回は第1回でしたが、われわれ審査委員としても“目からうろこ”と感じた作品がいくつかありました。来年もぜひこのような驚きを期待しています。ドラマづくりを通して、地域のそれぞれの活動が刺激されて、日本中の防災力が少しでも上がればいいなと思っています。

■防災を楽しむ若い発想力に期待

千野：不謹慎な言い方かもしれませんが、防災というものは、大きな災害が起きると盛り上がるという部分は避けられないところがあります。ただ、過去の経験や、災害時にどん

な人たちがかわかって何をしたのかといったことを伝えるようなドラマ、あるいは若い人たちの発想で防災を楽しんでしまう、楽しいことの中に防災が含まれるようなドラマができれば、これを提示するだけで、日ごろから防災に対する関心をひきつけることができると思います。

それに値するドラマが、今回これだけたくさん応募いただけたということで、第1回のコンテストは大成功でしょう。1月17日に受賞作品を紹介させていただいた時も、一般の方から「おもしろかった」という感想をいただきました。防災の番組ではそういう感想はほとんど聞いたことがないのですが、やはりこれまでとは違うアプローチですし、そのアプローチを非難する方もいませんでした。ぜひ今後とも協力させていただきたいなと思っています。

■学校と地域が連携してドラマづくりを

長坂：今回は本当にたくさんの作品をご応募いただきまして、ありがとうございました。審査委員の皆さんには、すべてを聞いていただき、読んでいただき、詳細なコメントをつけていただきました。本当に感謝申し上げます。先ほどThe 防災具さんから、聾啞の方のために映像とテロップを作ってプレゼントしたいというお話がありましたが、非常に感銘いたしました。このコンテストがゴー

ルではなくて、これが地域の防災づくりのスタートになればありがたいと思います。昨日、今回脚本部門に応募いただいて惜しくも落選した地域の方々や女子高校生のグループが、もう少し内容を練って音声のドラマにまで仕上げたいということで集まって話し合いを持たれたという情報が入ってきました。それを聞いて、私たちも感動いたしました。皆さん、ぜひ来年もコンテストに応募してください。学校の放送部が地域の方々にお題を募集して、ドラマ化は私たちに任せて、というパターンも出てくるといいですね。本当にありがとうございました。

ー閉会に寄せてー

坪川：ではこれで、第1回防災ラジオドラマコンテストの表彰式と記念シンポジウムをお開きにしたいと思います。次回のコンテストですが、4月ごろから募集を開始したいと準備を進めております。本日また霧島の新燃岳が3回目の噴火をしたそうです。日本海側は大雪の被害に見舞われています。日本列島どこで災害が起きるかわかりません。被害がないことが一番ですが、被害を未然に防ぐためにも地域の方々の協働と絆づくりが大事だと思っております。地域で防災について話し合ったり考えたりして、ぜひ来年度もコンテストに応募いただければと思います。本日はありがとうございました。

第2回 地域発・防災ラジオドラマコンテスト

2011年4月より募集を開始予定です。詳細は下記のホームページよりご覧ください。必要事項を情報登録のうえ、資料請求することも可能です。皆様のご応募をお待ちしています。

<https://bosai-contest.jp/drama2011/>

防災ラジオドラマに期待する

ー全体講評と審査委員会委員の声ー



審査委員長 大森一樹さん

(映画監督・脚本家、大阪芸術大学教授)

何よりも本コンテストでこれだけ多くの作品が応募されたことに災害、防災への関心の高さをあらためて知りました。また、1つひとつの作品に地域の住民、FM局、学校、行政、ボランティア団体などの真摯な取り組みも感じました。その上で申し上げるとすれば、災害時の人々、地域の取り組み、行政の対応など

心構えやマニュアルを台詞で語るだけの構成が多いことにやや物足りなさを感じました。

ドラマという名があるからには、ダイナミックな物語、対立、劇的な愛、勇気、判断など、フィクションの持つ感動がもう少しあってもいいのではと思いました。ラジオドラマは音だけのドラマで

す。台詞ひとつをとっても、阪神大震災の現場を体験した者としては、災害直後の人々がショックから言葉数が少なくなったり、長い沈黙があったり、突然怒鳴り合ったりと日常とはどこか違った記憶があります。そんなことも、防災ラジオドラマづくりのちょっとしたヒントにはならないでしょうか。



審査委員 今村文彦さん

(東北大学大学院工学研究科教授、日本自然災害学会会長)

創造性を高め防災人間力を涵養するー防災ラジオドラマに期待すること

■はじめにー防災・減災を考える時

突然の災害からわれわれの生命財産を守る、さらには、家族や地域を守る。さまざまな要素:経験・知識、対応、制度、科学技術、などが必要であり、これらを基にいかに関心していくか問われていると思われる。そこには、過去の経験や体験、知識を限定・固定することなく、各個人の想像性さらには創造性を促し高めることが肝要であり、このことにより各人の防災能力(ここでは、防災人間力と呼びたい)を向上させることができると、考えるに至っている。

■2つの「そうぞうりよく」

第1の「そうぞうりよく」は想像力である。一般に、想像性または想像力とは、心的な像または感覚や概念を作り出す能力である。たとえ、それらが視力、聴力または他の感覚を通して認められないときにでも、伝えることができる。そのため、想像力は経験に意味を、知識に理解を提供する助けとなり、世界(現象や仕組み)を理解する基本的な能力と言え。例えば、宇宙論や素粒子論などは、直接に見ることのできない世界であるが、想像から理論を組み立て、それを実証し展開している。従って、人

間の持つ能力の中でも最も優れたもののひとつであると言える。

さらには、想像力は、学習過程で鍵となる役割を演じることにも注目したい。この基本的なトレーニングまたは涵養するためにはストーリーの語り(物語)を聞くことさらにそれを作成することで向上すると言われる。とりわけ、選ばれた語(言葉)の正確さが「世界の喚起」に基本的な要因ともなる。

もう1つの「そうぞうりよく」である創造力は、一般に過去に存在しない、新たなもの、アイデアを初めて作り出す、考え出す能力をさす。将来の姿が見えない段階での災害の備えや新しい対応を考えるには、不可欠なものと思われる。

■防災ラジオドラマを作る

声・音は、五感をより刺激する、それにより想像力が高まる。一方、映像・視覚情報はより具体的であり内容を訴える力があるがために、どうしても一部の側面が誇張される傾向がある。また災害には、悲しみ、後悔、無力感、恨みなどさまざまな思いがある。その思いのどの部分をどのように伝えたら共感できるであろうか? 平常時とは違う状態をどのように創り出すのか? 困難の極みであ

ろう。だから、防災ラジオドラマは作成の過程で想像力がぶつかり合い、そのメッセージ性を高めると思われる。

自然災害を表現するには、できる限りの自然の法則に従う仕組みやその地域性を理解する必要がある。すなわち、地域の自然災害特性を理解し、時々刻々変化する状況を地域社会の中で、とらえていかなければならない。リアリティーがなければ、ストーリーに説得力を持たせることが難しくなる。歴史・文化、経験、教訓、知識を、自然の法則に載せ、スクリプトを書くことが必要であろう。

■防災人間力を涵養する

防災人間力を考える時に4つの能力が重要な要素であると考え。いずれも想像力・創造力をふくらませ、当事者意識(自立的な判断)が基盤となる。①自らの身を守り、乗り切る能力(自助)、②知識を備え、行動する能力(行動力)、③地域の安全に貢献する能力(地域の一員としての気づき)、④安全な社会に立て直す能力(実践力)。これらを向上させる場として防災ラジオドラマづくりに期待したい。



審査委員 中川和之さん

(時事通信社防災リスクマネジメント Web 編集長、静岡大学防災総合センター客員教授)

めったにない極端な自然現象が災害をもたらします。あたりまえの日常生活が破られてしまいます。その被害を大きくしないために、耐震補強や家具固定、津波避難路の確保、地域コミュニティの再構築など、普段からやっておかねばならない課題は山積みですが、でも非日常を意識してもらうことはとても困難です。恐いぞ恐いぞと言って脅す、破壊や悲劇を過剰に演出した映画やアニメでは、他人事感を増すだけで、わが事感を持って地域防災に結びつけることはできません。その困難な課題を乗り越えるための舞台が、防災ラジオドラマのコンテストなのです。

あたりまえの日常を送る人にとって、災害をイメージしてもらうためには、その人にとってのいつもの日常がどのように損なわれるのか、具体的なシチュエーションを自ら作りだしてもらう。ドラマづくりの過程で、地域を見直し、ドラマづ

くりで絆を深める。そして、評価してもらうことで、はげみにもなる。また、専門家や地域の行政もドラマづくりの材料を提供して協働で作ることで、災害事象が地域に身近に見えてきます。さらに政府や大学、学会、研究機関が評価に参画することで、社会に何を伝えていかねばならないかを気付くことができます。

今回、最優秀賞に選ばれた作品は、身近であたりまえだと思うことが災害によって損なわれ、それを同級生たちや地域の絆で乗り越えていこうという物語が選ばれました。「絆」という目的にふさわしい作品でした。

ドラマづくりの担い手は、災害時に活躍が期待されるコミュニティFMの平時の地域貢献は予想されていましたが、中学校や高校の放送部の活躍は予想外でした。NHKの放送コンテストの一部門にもなると素晴らしいと感じました。また、ドラマ性はなかったものの、訓練や

研修で使えるスキットのような作品もありました。ただ、災害想定が過大で無理矢理ドラマチックな場面を作りだそうとした作品が少なくなかったのは残念でした。科学的に適切な自然災害の理解をどう進めるか、という課題が残りました。

このコンテストは、内閣府と文部科学省の府省連携による社会還元加速プロジェクトです。私も参画した内閣府の災害被害を軽減するための国民運動の一貫ともなる取り組みです。地域で、身近なところで災害をどのようにイメージして備えるか。まちあるきや地図づくり、ご近所 DIG、さまざまな気付きにつながるワークショップ、防災課題の両義性を知るクロスロード、身近な気付きをもたらす被災者の声が満載の一日前プロジェクトなどに続く地域防災ツールとして、皆さんもドラマづくりに挑戦してみたいかがでしょうか。



審査委員 千野秀和さん

(NHK アナウンサー・ディレクター)

「現場の姿」が伝わる喜び～防災ラジオドラマの魅力～

今回、コンテスト審査委員を仰せつかり、2011年1月17日放送の「地域の絆があなたを守る」というNHKラジオ第1の特集番組にて皆さんの作品の中から優秀作をご紹介させて頂きました。57の作品に触れて「嬉しかった」というのが私の本音です。

私は新潟県中越地震の時、発生から1週間後の小千谷・旧川口町などで取材し、物資の供給や医療・ボランティアの活動を調べ、その日時や場所を伝えました。その時、現場で一番印象に残ったのは支える人、支えられる人互いの“表

情”でした。しかし、放送で伝えるのは“情報”のみ。「この活動で被災地にどんな効果があったか」「どんな人が現場を支えているのか」ということは当時まったく伝えられませんでした。

皆さんが作った防災ラジオドラマには、それがギュッと詰まっていました。防災という堅苦しい言葉に、命が吹き込まれていました。嬉しかったです。その意味で、私の中では全作品が“最優秀”でした。

特に興味深かったのは、被災体験や防災訓練を通じて多くの物語を持つ社

会人の皆さん、防災知識は未熟でもドラマづくりが得意な高校生など、特徴がくっきり表れたことです。今後は互いの持ち味をカップリングして、より魅力的で心に響く作品が生まれるなら、という期待を持ちました。

象徴的な美談ではなく、ごく普通に暮らす皆さんの“身近な誰かのために”という行動がドラマとして伝わるこの取り組みで「これなら私もできるかも」という人が一人でも増えてくれれば、と願ってやみません。

審査委員 関戸衛さん

(内閣府 総合科学技術会議事務局 社会基盤フロンティア分野担当)

大きな自然災害が起きた時、一番大事なことは自分で自分の身を守ること、その次に周りの人と互いに助け合うことだと思います。自分で自分の身を守るためには、その地域でどんな災害が起こりうるか、起きた時に自分がどう行動するかをできるだけリアルに想像し、準備しておくことです。防災ラジオドラマを作

ることを通じてその地域で起こりうる災害を想像し、さらにそのラジオドラマを聞いた地域の人々がそれに触発されて身の回りの防災のことを考える、そんな連鎖ができて地域の防災力が高まるとよいと思います。

第1回ラジオドラマコンテストの審査委員を務めさせていただき、中学・高校

の放送部の人たちがたくさんこのコンテンツに応募され、素晴らしい作品を作っていることを知りました。今後、高校・中学の放送部と地域の自治会・自主防災会が手を結んで作品をつくられると、この取り組みはさらにおもしろい展開をみせると思います。今後の防災ラジオドラマに期待しています。

審査委員 南山力生さん

(文部科学省開発局 地震・防災研究課 防災科学技術推進室長)

今回の防災ラジオドラマコンテストには多くの作品が寄せられました。審査に参加してその膨大な資料には大変に驚きました。応募作品に関係された皆さんには、心から尊敬と感謝を申し上げます。

特に、若い世代の人たちが真剣に取り組まれて多数応募いただいたことは、今後の防災対策の取り組みにとって大きな展望を開くものと思います。

防災活動にとって欠かせない地域の

絆を作り上げていくために、ラジオドラマづくりが、今後どんな発展をしていくのか楽しみです。



審査委員・主催者代表 長坂俊成

(独立行政法人 防災科学技術研究所 主任研究員、日本リスク研究学会 会長)

まずは、コンテストの主催者として、ご応募いただいた全国の方々、審査委員の方々に御礼申し上げます。また、コンテストの告知や制作をご支援いただきました自治体、コミュニティFM局、各地のNPO、内閣府、文部科学省をはじめとする国の関係府省の方々に対して、第1回のコンテストが実りある形で実施できたことを、心より感謝申し上げます。コンテストにご応募いただいたグループは、町内会や自主防災会をはじめ中学生のグループや社会福祉法人、介護ヘルパーの連絡会など、多様性に富んでいました。この多様性は、リスクガバナンス(協働型防災社会)の高度化や地域の絆づくりに誰でも初めの一歩を踏み出せることを示していると思われます。また、応募されたグループは、ドラマづくりの過程では、当研究所が開発しましたe防災マップなどを駆使し、

行政をはじめとする専門的な知見や地域固有の情報をたくさん集め、それらの情報を基にドラマづくりに取り組んでいただきました。それらの情報や課題、アイデアは限られた台本からは割愛されていますが、台本と同じ程度重要な地域の財産ですので、ぜひ、e防災マップも継続的に利用していただければと思います。

実は、コンテストを開催する直前に、ドラマづくりを中学生でも実践できるかを確かめるために、愛知県岡崎市の竜南中学生の11人の中学生の方々に協力していただいて、2日間で、台本作りから収録まで体験していただきました。その時の中学生の皆さんの笑顔と真剣な眼差しは今でも忘れることはありません。この笑顔に励まされて、最終的にコンテストに踏み切ったという経緯があります。ありがとうございました。また、コンテ

スト終了後、今回のコンテストに脚本部門に応募し、惜しくも今回のコンテストでは入賞できなかった女子高生が、地域の方々や台本を見直し、地域のお年寄りから中学生、小学生など、多世代のわたるチームを作り、最終的に音声ドラマを完成させたという話をうかがいました。まだ、そのドラマは聴いていませんが、コンテスト自体が新たな地域のドラマを生み出しているものと、聴かせていただけることをとても楽しみにしています。

また、ドラマづくりに取り組んだ多くの方々から、ドラマづくりの手法は、防災だけではなく、子育てや福祉、環境など、地域のさまざまな生活課題をテーマにすることができ、市民自治や市民協働を推進する有効なツールであるとの励ましの言葉をいただきました。ぜひ、防災以外の地域ドラマにも取り組んでみてはいかがでしょうか。

全体講評とコンテストの全作品は Web サイトをご覧ください。 <http://radio2010.bosai-contest.jp/>

第1回 地域発・防災ラジオドラマコンテストを振り返って

第1回地域発防災ラジオコンテストでは、北海道から九州まで、全国57の団体の皆さんより作品応募をいただきました。プロジェクトでは、応募いただいたドラマの脚本、音声ファイルの評価だけではなく、どのような内容の作品が応募されたのか、どのような地域の主体がドラマづくりに関わったのか、さらにはドラマづくりの過程でどのような関係性(絆)が生まれたのかを特に注目して分析を進めています。

■選ばれた災害の種類は？

応募いただいた57作品のうち、44作品が地震をテーマとする作品でした。防災に関する社会調査でも自然災害では地震に最も脅威を感じる方が多い傾向にあります。コンテストでもその傾向が表れた形になりました。地震以外は水害が6作品、そのほかは津波、火山噴火、雪、山火事などの災害から各1作品の応募がありました。また、災害を特定しなかったドラマも2作品、自然災害以外のインフルエンザを取り上げた作品もありました。

■ドラマを作成した主体は？

コンテストを開始した時は、自治会や町内会のような自治組織やそれが組織する自主防災会などの応募が中心かと思われましたが、ふたを開けてみると5作品とむしろ少なく、多様な集団からの応募がありました。

最も多かったのは学生主体のグループで21作品の応募がありました。このグループの作品は放送技術やドラマの制作技術に長けているものが多く、ドラマの質という意味では非常に高いレベルのものがありません。次いで防災を主目的としない

さまざまな地域サークル、同好会や趣味の会などからの応募が20作品ありました。コミュニティ放送局が軸となったものが4作品、防災を目的としたNPOや支援グループが3作品、民間事業者が3作品、家族で作成したドラマが1作品ありました。

■どういう主体とかがわりを持ったか？

応募グループだけでドラマを作ったものもありますが、ドラマ制作過程でさまざまな主体と関係、連携を取ることが望ましいというのがこのコンテストの特徴です。

協働した相手について各グループの資料から数えてみると、最も多いのが地域の防災NPOで、13グループが連携を取っています。次いで行政と学校が同数で10グループ、防災を目的としていない地域サークルが9グループ、地域の一般市民の方が6グループ、自治会・自主防災会、民間事業者、コミュニティFM局が各4グループ、消防や警察、防災の研究者というのが各1グループとなっています。入賞作品でも横浜のThe防災具や、鶴ヶ島市の公民館運営審議会などはさまざまな主体と連携した結果としてドラマが作られています。

■自己申告シートの傾向は？

コンテストでは、各応募団体に募集要項で明記した評価の視点に沿った24項目からなる「自己申告シート」を作品と一緒に提出していただきました。脚本部門、ドラマ部門とでは若干の差がありますが、おおむね以下のような傾向があります。

①地域の災害歴や防災の現状を調べて、それに基づくドラマを作

るという点は、かなり多くのグループで実践できていた。

②一方でドラマづくりのために作成主体とは別の地域関係者との関係性づくりがやや弱く、特に学生グループはその点が不足している。

③脚本作成段階でさまざまな関係者と脚本を使った意見交換を行う点については、全項目の中でも最も実践度が高く、この手段が有効であると思われる。ただし地域住民などにアンケートを行い意見を反映するという点は時間的制約もあって活動としてはできていないところが多い。

④現状の防災対策に対する改善提案や問題提起は、できているところとできていないところが半々である。

■第2回コンテストに向けて

このコンテストの最大の目的は、ドラマそのものを作成することよりも、その作成過程に地域のさまざまな関係者が防災にかかわっていることを認識し、その絆を強めていくことにあります。さらにドラマというわかりやすい表現手段をとることで、誰でもが防災にかかわれる環境を生み出し、作られたドラマを使ってこれまであまり行われていなかったリスクに関する対話(リスク・コミュニケーション)が始まるのが大切です。第2回コンテストではドラマの活用という点が特に重要な評価軸として注目されています。

ドラマづくりのツールとして、当研究所が開発しているe防災マップや、活動を記録し共有できるグループウェアを活用してみてください。

コラム ●平成 22 年度つくば市地域防災訓練：上郷小学校区●

茨城県つくば市上郷小学校区では、2010 年 11 月 7 日、12 月 12 日の 2 回にわたり、災害ボランティア養成講座（主催：つくば市社会福祉協議会、協力：防災科学技術研究所）を実施しました。その成果を踏まえ、2011 年 2 月 6 日に上郷小学校区内の 31 区会が主体となり、地域住民や子どもたち約 250 名が参加して、つくば市地域防災訓練（主催：つくば市地域防災訓練実行委員会）を実施しました。

訓練では、まず 31 の区会別に、身の回りや近所の安否確認を行いながら、一時避難所となる公民館などに集合し、区会長の引率で住民と子どもが避難所である上郷小学校に移動しました。上郷小学校へ 31 の全区会が集まったところで e コミマップを使った机上訓練を行い、2 回の災害ボランティア養成講座を通じて作った訓練シナリオを地域全体で共有しました。その後、避難所運営組織を立ち上げ、住民自ら避難所を運営するための役割について、地域住民が分担して体験しました。屋外では、煙ハウスや消火訓練も行われました。

子どもたちはジグソー防災マップづくりと防災絵日記づくりに挑戦。マップづくりでは避難所である小学校を中心に、学校や自宅、災害時に安全な場所、危険な場所、親との待ち合わせ場所などを見つけながら、災害時の対応について学びました。絵日記づくりでは地震が起きた時、親が迎えに来られず学校に残っている様子、迎えに来るまで学校で必要なことなどを考えて、発表しました。



上郷小学校に移動する避難訓練



避難所の机上訓練



ジグソー防災マップづくり



防災絵日記づくり



避難所運営体験

コラム ●【那珂市】災害ボランティア養成講座●

茨城県的那珂市社会福祉協議会が主催する「災害ボランティア養成講座」に協力しました。当講座では、那珂市で想定される地震とその被害について考え、当研究所が行っている全国の防災取り組みの事例紹介や防災マップづくり、防災ラジオドラマづくりを通して、「知」と「絆」で地域防災力を高めるため

の手法などについて学びました。

講座は 2 月 5 日の 10：00～15：00 に、那珂市の災害ボランティア登録者約 60 名を対象に、那珂市総合保険福祉センターで開催されました。当日は当研究所をはじめ、茨城レスキューサポートバイクのメンバーも協力。

まずは、那珂市赤十字奉仕団の協力をいただき、参加者が自分の昼食として非常食を準備。その後、①災害ボランティアとはどのようなものか、②那珂市で起こりうる自然災害と被害について学び、③ボランティア活動の支援と受援を考えるグループワークを行いました。

その後皆で作った非常食をいただき、午後は④マップを活用した災害時の地域受援について検討し、⑤災害ボランティアが誰とどのように協力、連携しながら被災者にどのような支援ができるかといった対応シナリオづくりを行いました。



自然災害と被害について学ぶ



グループワークの様子



参加者が非常食を準備



防災マップで地域の受援を検討

コラム ●あまみ FM 主催による豪雨災害時のコミュニティ放送検証シンポジウム●

2010年10月20日、鹿児島県奄美地方は記録的な集中豪雨に見舞われ、3名の尊い命が失われました。今回も亡くなられた方々はいずれも高齢者で、うち2名は認知症のグループホームの入居者でした。地域で要援護者を支え合う仕組みの難しさが今回もあぶりだされた形となっています。

このような災害時に地域コミュニティを支える活躍をするメディアにコミュニティ放送があります。奄美地方では奄美市

に本部を置くあまみ FM (77.7MHz) が災害発生日から5日間、24時間放送で地域情報を流し続けました。災害から3カ月を経過した2011年1月20日、当研究所も後援するあまみ FM 主催の災害時放送を考えるシンポジウム「本当に役立ったのか、災害放送！」が開催され、長坂グループ長がゲストコメンテーターとして参加しました。シンポジウムでの議論の詳細は研究所の報告書としても公表される予定です。



シンポジウム「本当に役立ったのか、災害放送！」

コラム ●北条コミュニティまつり「スノーフェスタ in 北条」●

2011年2月6日(日)、新潟県柏崎市北条コミュニティセンターで「スノーフェスタ in 北条」が開催されました。当日は、春のような天気で来場者も多く、活気のあるスノーフェスタとなりました。

来場者は、11時に開店した屋台で腹ごしらえをして、コミュニティの体育館でストレッチをした後、保育園児の元気一杯の踊りや中学生のよさこいの熱演に見入っていました。会場は熱気に包まれ、暑いくらいでした。

また今回のスノーフェスタでは、北条市民サポーター編集会議が制作し、当研究所が主催する防災ラジオドラマコンテストで優秀賞を受賞したドラマの脚本が北条小学校の子どもたちによって上演されました。小学生たちは、短い準備期間の中で、一生懸命に稽古をしたとのこと。来場者にその成果を披露するとともに、齋喜校長先生が、「小学校と地域が連携して子どもたちを守っていききたい」と話されました。

北条では2009年に行った小学校と地域が連携した防災訓練の成果を受けて、2010年は中学校が訓練に加わりました。地域の関係性が少しずつ広がり、また深まりつつあります。



スノーフェスタ in 北条

コラム ●内閣府社会還元加速プロジェクト「災害情報」実証実験●

内閣府では、省庁連携による社会還元加速プロジェクト「きめ細かい災害情報を国民一人ひとりに届けるとともに災害対応に役立つ情報通信システムの構築」を推進しています。モデルとなる地域を設定し、各府省が開発している防災・減災に関する技術をまとめて、これを地方自治体の防災訓練等に利用することで、システムの有効性の確認や改善点の把握などを行う



三条市で行われた机上防災訓練

ものです。この一環として、新潟県見附市(2010年7月7日)、三条市(同年12月3日)において2回の実証実験が行われ、当研究所も参加しました。

当研究所では、

関係主体間での災害リスク情報の相互運用の必要性を提案しており、これを可能とする「e コミウェア」を研究開発・一般提供しています。この実証実験では、自治体の災害対応において、外部機関の災害情報や市民からの投稿情報、市が発令する避難情報等を、関係主体間で相互に運用・活用することに主眼を置いています。

見附市、三条市ともに水害を想定した被害状況を設定し、各市の災害対策本部が災害の判断・意思決定を行う机上防災訓練を実施しました。訓練では、外部のハザードマップ、市民からの投稿情報をはじめ、避難情報など市が判断・意思決定した情報を相互に運用できる環境(分散相互運用環境)を構築し、市と地域住民が協働して災害対応を行うシナリオで机上防災訓練を進行しました。なお、実証実験のための基盤システムとして、e コミマップをはじめとした「e コミウェア」が活用されました。

※「e コミウェア」「分散相互運用環境」については、『リスク情報と地域防災』Vol.7、Vol.12をご参照ください。

プロジェクト活動報告

● 第2回防災コンテストを開催いたします

2010年度はe防災マップ、防災ラジオドラマ、防災マッシュアップの3つの防災コンテストを実施いたしました。地域の自主防災会や町内会のような防災活動団体・自治組織だけでなく、福祉関係団体、各種NPO、市民活動団体、趣味・サークルのグループ、小中高生、大学生、民間の企業、地域イベントの実行委員会、コミュニティFM局、ご近所の友

人・知人グループなど、実に多様なグループからご応募をいただきました。さまざまなグループが地域防災への第一歩を踏み出されたと思います。ありがとうございました。

2011年度も引き続き「e防災マップコンテスト」と「地域発・防災ラジオドラマコンテスト」を実施いたします。地域防災力をさまざまな関係者の協働の中で高める良い機会です。多くの方々のご参加をお待ちしております。

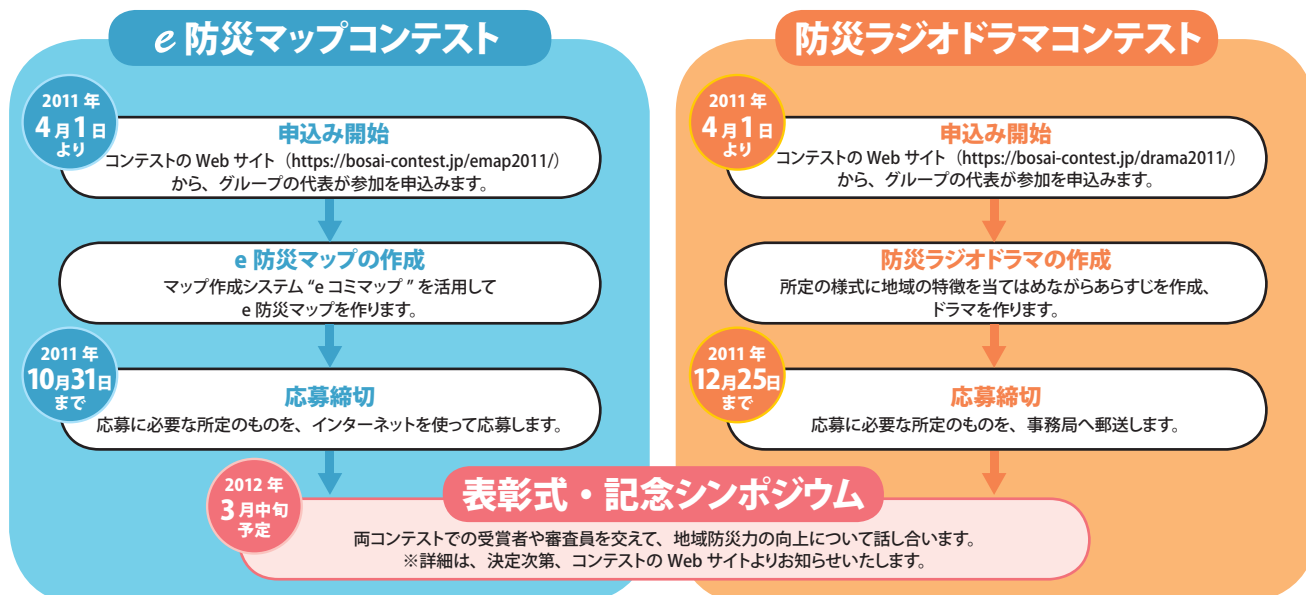
● 防災科学技術研究所 一般公開 ●

4月24日(日)に当研究所の一般公開を行います。研究成果や研究資料の展示だけでなく、各種実験や体験イベントなどをご用意しておりますので、皆様お誘いあわせの上お越しください。

【日時】2011年4月24日(日)
10:00～16:00

【場所】(独)防災科学技術研究所
茨城県つくば市天王台3-1

《第2回e防災マップ・防災ラジオドラマコンテスト》開催日程



Web サイトで公開中!

◆ BOSAI DRIP

プロジェクトの日々の活動やイベント案内など、随時発信しています。

<http://risk.bosai.go.jp/>

◆ 広報誌「リスク情報と地域防災」

広報誌のバックナンバーをご覧ください。

<http://risk.bosai.go.jp/hp/pub/magazine/>

◆ BOSAI DRIP チャンネル

研究発表などの動画をYouTubeで公開中です。

<http://www.youtube.com/user/bosaidrip>

◆ メールニュース

毎月1回、グループの活動をメールニュースで配信しています。

お申し込みは、<http://risk.bosai.go.jp/hp/news> から。

◆ 地域発・防災ラジオドラマ

各地で制作された防災ラジオドラマを聴取できます。

<http://risk.bosai.go.jp/hp/drama>

◆ Twitter

Twitterでも最新情報を発信しています。フォローはお気軽にどうぞ。

http://twitter.com/bosai_drip

発行日：2011年3月31日

編集・発行：独立行政法人防災科学技術研究所 (NIED)

防災システム研究センター

災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト

リスク研究グループ

〒305-0006 茨城県つくば市天王台3-1

TEL 029-863-7553 FAX 029-863-7541

メールアドレス：drip-office@bosai.go.jp

URL：http://bosai-drip.jp/

編集協力：(株) 地域協働推進機構

研究グループメンバー

長坂俊成・白田裕一郎・坪川博彰・岡田真也・田口仁・須永洋平
李泰榮・池田三郎・佐藤隆雄・三浦伸也